

マネージメント情報

2026 年 6 月



この記事は、機関誌や日常の出来事の中からわれわれが注目した話題を皆様に提供するものです。
ご質問、ご要望などなんでもお寄せくだされば、今後テーマとして取り上げたいと思います。

傷を治すための三原則 ～安静・清潔・保湿～

治癒の促進 牛の外傷は、蹄病、乳頭損傷、裂傷、除角後の創部、カラスによる傷、手術創など、さまざまな場面で発生します。しかし、傷の種類や部位が異なっても、治療の基本原則は共通しています。

第一は「安静」です。傷ついた組織が繰り返し刺激を受けると治癒は遅れます。蹄病では免重処置や蹄ブロックがこれにあたり、一般外傷でも患部を保護し、その後の刺激を避けるよう維持することが重要です。**第二は「清潔」**です。創部が糞尿や泥などで汚染されると、細菌感染によって治癒が妨げられます。適切な洗浄や包帯処置だけでなく、牛床や飼養環境を清潔に保つことも大切です。ただし、清潔と無菌は異なります。かつてはヨードチンキなどの強い消毒薬を傷に使用することが一般的でしたが、現在では必ずしも推奨されていません（臍帯処理などは別です）。過度な消毒や、包帯交換のたびにゴシゴシ擦ることによって生体組織まで傷つけてしまうと、かえって治癒を遅らせる場合があるため注意が必要です。

第三は「保湿」です。以前は傷を乾燥させる治療が一般的でしたが、現在では適度な湿潤環境が治癒を促進すると考えられています。創面が乾燥しすぎると細胞の移動や増殖が妨げられ、逆に湿りすぎると浸軟や感染の原因となります。目標は「ベチャベチャでもカリカリでもない、しっとりした状態」です。乾かしすぎると、分厚い痂皮（かさぶた）ができてしまい、結果、痂皮は剥がれ、再度新しい傷ができてしまいます。

薬剤や消毒剤に注目が集まりがちですが、どれほど優れた薬剤を用いても、安静・清潔・保湿が確保されなければ十分な治療効果は期待できません。傷を見たときには、「どうすれば安静にできるか」「どうすれば清潔を保てるか」「どうすれば適度な湿潤環境を維持できるか」という視点で考えてみてください。



ストールの柱で傷ついた後、カラスにもやられているような傷。
・水洗い・抗生剤塗布・保湿クリーム・ゴアテックスシート・バードネットの装着。
8日目にはきれいな肉芽が再生してきました。（経過観察中）



ロボット搾乳における蹄浴

ドルテ・ドッファー先生のおしえ

かやの

はじめに

今年 3 月にウィスコンシン大学の蹄管理のスペシャリストかつ疫学者のドルテ・ドッファー先生が来日され、私も大変刺激を受けました。タイトルでは「ロボット搾乳における蹄浴」としましたが、ロボットに限らず、個人的にビビッときたドルテ先生のコメントをいくつかピックアップしてここで共有したいと思います。

フットバスの交換頻度や濃度をチェック

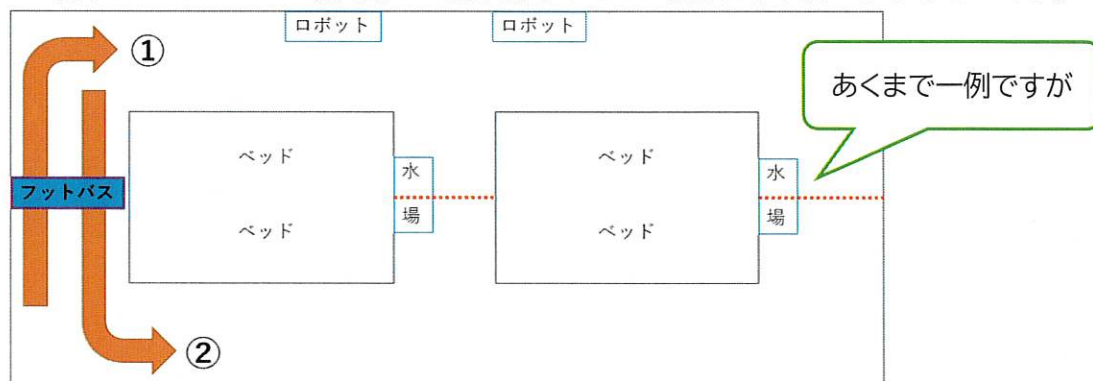
当然のことなのになかなか難しいのが、適切なフットバスの交換頻度です。ポイントは牛群の DD 割合がどうなっているか。つまり、**モニタリング（普段牛群にどれくらいの DD がいるのかといった定期的な情報）が重要**となってきます。いままで数パーセントであったのが、急に増えてきたというトレンドがわかれば、DD が蔓延している可能性があります。その際にチェックすべきは**フットバスの交換頻度と濃度**です。あくまで目安ですが、硫酸銅であれば 2%、ホルマリンであれば 3%程度の濃度が良いとされています。一方で、除糞を適切に行わなければ蹄は常に汚く、蹄浴の効果はもちろん半減してしまうでしょう。

たとえば、その濃度で 1 日 2 回薬液を交換している牛群があったとします。その牛群で DD が増加傾向にあれば、交換頻度をあげることが必要かもしれません。**交換頻度が低いと薬液としての効果を失ってしまい、最悪の場合トリボネーマ（DD の原因細菌）感染を牛群内で広げてしまう可能性があります。**

もし、牛群内ですでに DD が蔓延している状態（M2 病変（前回 5 月号の富田くんの M 情報を参考にしてください）が 30% 以上）であり、週に 2 回しか薬液を使用した蹄浴をしていないのであれば、週に連続して 3 回薬液フットバス（適切な濃度の硫酸銅等）を設置することが求められているかもしれません。

設置場所をチェック

ロボット搾乳をしている多くの農場では、フットバスは搾乳ロボットの出口に設置していると思います。しかしその場合、十分な長さを確保できないことも往々にしてあります。さらに、ロボットから出た直後に急な段差などがあると角質病変を誘発しかねませんし、適切な濃度を維持するために適度な薬液の交換が必要となってきます。理想を言えばキリがありませんが。最近だと蹄の自動洗浄も出ているそうです。ドルテ先生から提案していただいた現実的かつ効果的なひとつの提案は、下図のようなものです。



赤の点線でゲートをして、①、②のように**牛群の全頭を強制的にフットバスに通す**という方法です（往復させるので、2 回四肢が浸かる）。それを 1 日 2 回（2 往復）実施する。この方法の良いところは、一気に全頭通すので、薬液が薄まりにくく、放置する場合よりも適切な濃度が維持されやすいということです。また、ウシを追う際に走らせるのではなく**ゆっくりと追う**ことも忘れてはいけないポイントです。

データをとることが大事！！

先生が何度も強調していたのは、**データの重要性**です。牛群にどれだけ DD がいるのか、それは先月や去年と比べて多いのか少ないのか、こうした「トレンド」はデータを定期的にまとめていくことでわかります。そうでなければ、そもそもフットバスの効果について判定さえも難しいからです。

退職のご挨拶

このたび、私事ではありますが、6月30日をもちまして退職することとなりました。
在職中は、農家の皆様をはじめ、多くの方々に大変お世話になり心より感謝申し上げます。

授精業務を通して、日々皆様の牛に対する思いや、仕事への熱意に触れながら仕事を
させていただきました。

現場での会話や何気ないやり取りも、今となっては大切な思い出です。たくさんの経
験をさせていただき、人としても大きく成長させていただきました。

これからは、釧路管内にはなりますが自分自身も酪農の道へ進むことになりました。
これまで皆様のもとで学ばせていただいたことや、現場で培った経験を活かしなが
ら、一から頑張っていきたいと思っています。今後も酪農に携わる者として皆様から
教えていただいたことを大切にしていきたいと思っています

至らない点多々あったと思いますが、皆様に支えていただきながら今日まで勤める
ことができました。本当にありがとうございました。

末筆ながら、皆様のご健康とご多幸を心よりお祈り申し上げます。

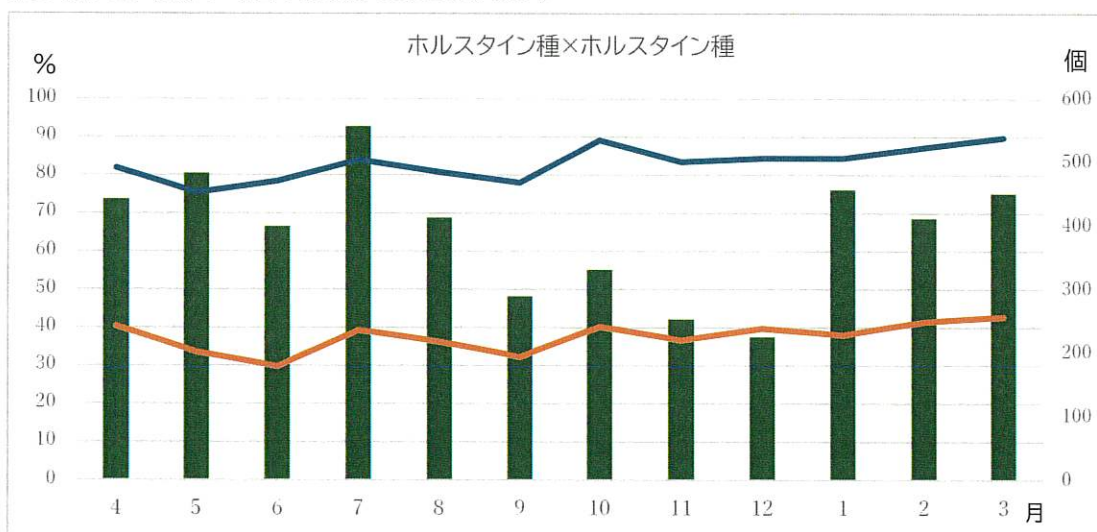
短い間でしたが、4年間本当にお世話になりました。

2026年6月30日 夏井 美聡

令和 7 年度 胚生産成績報告

こんにちは、ラボの池田です。先日尾岱沼へ人生初の潮干狩りに行ってきました。ひたすら掘るだけという作業が性に合ったのか気づけば3時間休まず夢中で掘り続け、特大サイズのアサリを大量にゲットしました。周りには潮干狩りの猛者たちがたくさんいて、装備や掘りかたをこっそり観察したので来年は準備を完璧にして挑みたいです ✨

さて改めてになりますが、私たち受精卵部門では OPU や食肉処理場由来卵巣から採取した卵子を用いて体外受精（IVF）・培養を行い、体外受精卵を生産しています。現在 OPU に関しては、弊社獣医師・検卵技術者が農場へ伺って実施する「出張 OPU-IVF」をはじめ、他社獣医師の先生方が採取した卵子をお預かりして行う「IVF 委託培養」、さらに 2022 年末始動の「THMSG 預託 OPU-IVF」と様々な形で体外受精卵生産に取り組んでいます。このたび新年度を迎え、令和 7 年度の胚生産成績が出そろいましたので、その一部ではありますがご報告させていただきます。以下データは出張 OPU-IVF と THMSG 預託 OPU-IVF の成績を合わせ、月別平均値で表したのになります。



分割率（青色折れ線グラフ）：

IVF に供した卵子のうち受精が完了かつ分割(発生)を開始した、将来胚盤胞まで進む可能性がある卵の割合です。分割率は、卵子が精子を受け入れる準備(成熟)ができているかどうか？も重要ですが、特に使用する種の精液性状(濃度・活力、他見た目ではわからない受精能力…)の影響を受けやすいです。そのため種雄牛ごとの特徴・ドナーとの相性を観察しながら濃度調整を行い、ドナー間でのばらつきが最小限になるよう努めています。令和7年度多く使われた種のほとんどは、平均80%越えと良好な分割率でした。月ごと平均値でみると、ホルでは75%~90%前後、黒毛では70%~80%前後で推移しており、年間を通して安定した条件下でIVF・初期発生培養を行うことができたと考えています。

発生率（オレンジ色折れ線グラフ）：

IVF に供した卵子のうち移植可能な胚盤胞(A・Bランク含む)まで発生した割合を示します。発生率は例年夏季~秋冬にかけて低下しやすい傾向があります。原因の一つは『暑熱ストレス』のように、外気温によって体内にいる卵子がダメージを受けやすく、かつその影響が2.3か月先にでてくることもあるためです。ラボでは発生率25~30%を1つの目安とし、これを安定して上回る場合は良好な成績と考えています。グラフにしてみると20台後半~40台前半を行き来する形になりました。黒毛で夏場に28%まで下がってしまいましたが、例年と比べてホル・黒毛ともに秋以降発生率の回復がかなり早く、高い数字を維持することができました。

生産数（緑色棒グラフ）：

A・Bランク胚盤胞の総生産個数です。令和7年度はホル：4712卵、黒毛：3934卵、計8646卵(前年度+2137卵)作出しました。OPU実施頭数・生産数ともに着々と増加しています。

ドナー飼養管理からOPU環境準備・立ち合いまで皆さまにご協力いただき、年間の平均発生率はホル：38%(前年度+5%)、黒毛：35%(前年度+2%)と、過去3年間で最も高い結果となりました ✨ 折れ線グラフがさらに高い位置で安定して推移するよう、ラボ一同技術力向上に努めてまいります。また、次回は受胎率に関しても併せてご報告できればと思っております…！

今年度もどうぞよろしくお願いいたします！

